

山田耕筰（1886–1965）は明治維新以後、日本に入ってきた西洋音楽を学んだ最初期の作曲家。20代で3年間、ドイツに留学し、日本人が書いた最初の交響曲《かちどきと平和》を作曲。指揮者としても活躍し、ベルリン・フィルを指揮した最初の日本人となった。山田は幅広い活動の中で「赤とんぼ」など、日本語のイントネーションを活かした歌曲を数多く生み出したが、連作歌曲集《AIYANの歌》（1922）もその一つ。

同作は近代日本を代表する詩人・北原白秋（1885–1942）の詩集『思ひ出』所収の「柳河風俗詩」に曲を付けたもの。九州・柳川の言葉を巧みに用い、AIYAN（「下女」の意）の心理や言動を描いた表題作のほか、同地の様々な情景が描かれている。ユーモラスで抒情的な旋律をはじめ、ピアノ伴奏のユニークな音使いや和声の微妙な揺らぎなどが、詩情に生气を与えている。

童謡「海」などで知られる作詞家・林柳波（1892–1974）の「お六娘」をもとに1930年、橋本國彦（1904–49）が作曲。「お六娘は丸顔でござる 花のさかりのはたちでござる」といったふうに、随所に散りばめられた「ござる」という言葉が軽妙なリズムを生み、お六娘が自分に言い寄る若者を次々に振っていく情景が愉快地に描かれる。橋本特有のモダンな感覚が躍動するピアノ・パートも聴きどころ。

まだ十代半ばだった三善晃（1933–2013）が、「お母さん詩人」と呼ばれた高田敏子（1914–89）の詩から「秋」にちなんだ四篇に付曲したのが《四つの秋の歌》（1948）。のちに女声合唱用にも編曲され、多くの人に親しまれている。

「秋」という季節に寄せる心情・情緒を表現した詩が、素朴かつ繊細に歌われる。ピアノ・パートには後年、パリに留学し、デュティユーのもとで学ぶ三善ならではの精緻でモダンな感性、ハーモニクスが溢れている。

林光（1931–2012）の《四つの夕暮の歌》（1959）は、「夕暮れ」という時刻に寄せた4曲からなる歌曲集（1970年には混声合唱用に編曲された）。

戦後を代表する詩人である谷川俊太郎（1931–2024）の詩集『愛について』と『あなたは』から「夕暮れ」をモチーフにした4つの詩が選ばれ、その雰囲気や寂寥感が、演劇にも親しんだ林独自のセンスによって表現されている。ピアノ・パートは、時にドビュッシーを思わせ、作品世界をさらに豊かなものになっている。